国際理解教育と多文化教育の橋をかける
――故森茂岳雄先生を偲ぶ――

藤原孝章

森茂岳雄（中央大学名誉教授）先生が体調を崩されたという連絡を受けたのは、2024年3月2日のことでした。森茂先生と筆者は、１ヶ月前に開催された2月初旬の独立行政法人国際協力機構（JICA）地球ひろば主催、日本国際理解教育学会後援の「国際理解教育・開発教育指導者研修」にアドバイザーとして、一緒に参加したばかりでした。

ご本人の希望もあって、3月初旬の先生の体調が良い日に、オンラインのお見舞い会を開きました。リモートでしたが先生とそのご家族（奥様の麗華さん、次女の遥さん）と対面したのは、筆者のほかに、大津和子さん（北海道教育大学名誉教授）、中山京子さん（帝京大学）、釜田聡さん（上越教育大学）、姜英敏さん（北京師範大学）、中澤純一さん（東京未来大学）、周勝男・鄒聖傑さんご夫妻（厦門大学）、津山直樹さん（創価大学）といった研究仲間や先生の教え子さんたちでした。

それから１週間あまりの3月１０日に急逝されたとの訃報を聞くとは思いもよりませんでした。元気そうなお姿を拝見していただけに、驚天動地の心地、茫然自失の有様でした。享年満73歳、私よりも1歳年上、あまりにも早いご逝去にご家族の愛別離苦は想像に難くなく、お悔やみの言葉もありません。

ここで公開されている情報から、森茂先生の略歴を紹介させてください。先生は筑波大学大学院教育学研究科博士課程（社会科教育学専攻）を修了されたあと、武蔵野音楽大学専任講師、茨城大学教育学部助教授、東京学芸大学教育学部教授を経て、2000年4月に中央大学文学部教授として着任、2022年3月に中央大学名誉教授の称号を持って退職されました。その間、中央大学大学院文学研究科委員長、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員教授、中国・河北科技大学客員教授、サンフランシスコ州立大学教育学部客員研究員も歴任されています。

所属する学会は、メインの日本社会科教育学会、異文化間教育学会、日本国際理解教育学会をはじめ、日本教育学会、日本教育方法学会、日本公民教育学会、日本カリキュラム学会、日本グローバル教育学会など多岐にわたっています。特に、日本社会科教育学会（2016～2018年）、日本国際理解教育学会の両学会（2019～2021年）では会長を歴任され、当該研究分野の充実と発展に尽くされました。

社会貢献活動においても、文化庁「児童生徒等に対する日本語教師初任者研修事業評価委員会」委員、文部科学省「外国人

児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業専門家会議」委員、「独立行政法人国際協力機構横浜センター海外移住資料館学術委員会」委員、「公益財団法人かながわ国際交流財団」理事、「八王子市多文化共生推進評議会」委員長など政府・自治体の教育行政・教員研修などの専門家として活躍されました。

森茂先生の研究分野は、ご専攻の社会科教育にとどまらず、文化人類学や移民研究など、国際理解教育、異文化間教育、多文化教育にまで広がっています。むしろそれらの領域に橋をかけられてこられたといった方がよいでしょう。以下はその出版物の一部です。

・『国際理解教育と多文化教育のまなざし－多様性と社会正義／公正の教育にむけて―』（森茂岳雄監修、川崎誠司・桐谷正信・中山京子編、明石書店、2023年）
・『現代国際理解教育事典（改訂新版）』（日本国際理解教育学会編、共編著、明石書店、2022年）
・『国際理解教育を問い直す―現代的課題への15のアプローチ―』（日本国際理解教育学会編、共編著、明石書店、2021年）
・『「人種」「民族」をどう教えるか－創られた概念の解体をめざして－』（中山京子・森茂岳雄・東優也・太田満編、明石書店2020年）
・『チャレンジ！多文化体験ワークブック―国際理解と多文化共生のために―』（村田晶子・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編、ナカニシヤ出版、2019年）
・『社会科における多文化教育―多様性・社会正義・公正を学ぶ―』（森茂岳雄・川崎誠司・桐谷正信・青木香代子編、明石書店、2019年）
・『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編、国立民族学博物館、2016年）
・『国際理解教育ハンドブックーグローバル・シティズンシップを育む―』（日本国際理解教育学会編、共編著、明石書店、2015年）
・『日韓中でつくる国際理解教育』日本国際理解教育学会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）共同企画、大津和子編、共著、明石書店、2014年）
・『現代国際理解教育事典』（日本国際理解教育学会編、共編著、明石書店2012年）
・『グローバル時代の国際理解教育―実践と理論をつなぐ―』（日本国際理解教育学会編、共編著、明石書店、2010年）
・『学校と博物館でつくる国際理解教育』（中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編、明石書店、2009年）

森茂先生と筆者は、日本国際理解教育学会でともに活動してきました。2001年に理事になって以降、それぞれ常任理事、副会長、会長を歴任し、学会を支えてきました。この間、他学会の方々も驚くような、上記に掲げた日本国際理解教育学会が編纂した多くの出版物を内外に問うことができました。これらは、ひとえに森茂先生の学識と知見なしにできない事業でした。また、これらの出版物の編集校正作業を、東京のみならず北海道の温泉地、ひいては観光抜きのハワイで行うなど思い出はつきません。

事実上最後の出版となってしまいましたが、『国際理解教育と多文化教育のま

なざし』（2023年）においても先生の広い知見と人的ネットワークを見ることができます。

「多様性と社会正義、公正の教育」をキーワードに掲げ、デンマーク、中国、台湾、韓国、アメリカなどの外国および日本の国際理解教育、多文化教育など関連領域を横断するインターフェイスな成果は、30名以上にも及ぶ執筆者で埋められ、先生を支える後進や同輩の研究・実践チームの豊かさを示すものといえます。

しかし未完の取り組みもあります。それは、日本国際理解教育学会現副会長の釜田聡さん（上越教育大学）、姜英敏さん（中国・北京師範大学）、金仙美さん（韓国国際理解教育学会副会長・中央大学校）を窓口に研究と実践を重ねてきた日中韓『異己』理解・共生授業プロジェクトです。2013年に始まったこのプロジェクトは2024年度で一区切りの10年になります。2024年1月下旬には上越市で、10年間の成果と今後の研究のための会合を持ったばかりでした。プロジェクトの中心メンバーの一人として活躍されてこられた森茂先生の悔しい気持ちは痛いほど想像されます（写真1　12024年1月『異己』理解・共生授業プロジェクト上越会議にて）。

最後になりますが、筆者は、中国の北京や大連、南京での国際理解教育の研修・講演会においても森茂先生と同行いたしました。これらは先生のご案内と中国の人々とのつながりがないと実現不可能なものばかりでした。また、それらの旅行では中国ご出身の奥様の麗華さんや中国に留学中の娘さんとともにおられて、本当に良いご家族だと感動しておりました（写真2　22015年５月大連ツアーにて）。

ここに改めて、森茂先生の急逝を悔やむとともに、先生が天国でもご活躍されることを祈念して、追悼の言葉を終わらせていただきます。(2024年皐月記)

（作者紹介：同志社女子大学名誉教授、元日本国際理解教育学会会長）